

若年者雇用対策への期待

研究開発部
北村 安樹子

< 増加する無業者 >

学校を卒業後、進学も就職もしない、あるいはできない若者が増加している。文部省の『学校基本調査』によると、このような若者は90年以降急増しており、特に高校卒業生において増加が著しい(図表1)。いわゆる「フリーター」を含むと考えられるこのような若者の増加は、近年社会的にも注目を集めている。

この背景には、適職探しや自分探しを重視する若者の志向性の変化もあると考えられる。一方で、高卒求人倍率の低下や、企業が若年労働力に期待する職種と若者が求める職種のミスマッチなど、雇用環境をめぐる構造的な問題である側面も大きい。

< 高卒無業者の進路に対する評価と進路選択過程 >

文部省では、学識経験者等による「高校生の就職問題に関する検討会議」を設置し、『高校生の就職に関する実態調査』を実施した。卒業後3年あるいは1年が経過した卒業生に対する追跡アンケート調査の結果、卒業時に進学も就職もなかったことを「もっと就職について真剣に考えて、努力すればよかった」と感じている者は、それぞれ15.9%、20.6%を占めた(図表2)。「自分が、何をやりたいのか分からなかったから、後悔はしていない」、「進学・就職以外にやりたいことがあったから、後悔はしていない」という者がいる一方で、進路選択を悔やんでいる者も少なくないと考えられる。

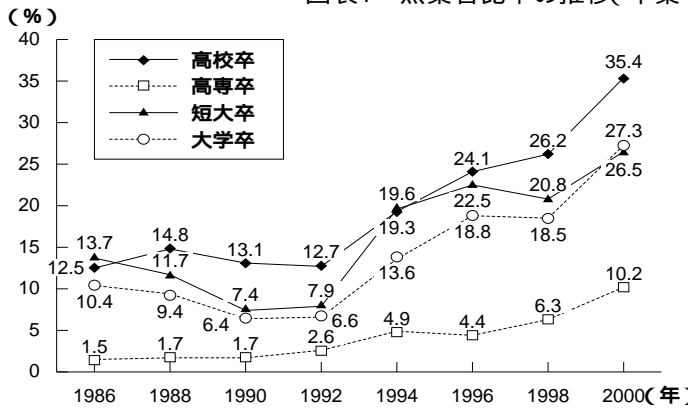
また、首都圏の高校3年生を対象に行った別の調査によれば、卒業2カ月前の1月時点で進路が未決定の者のうち、「フリーターになるかもしれない」と考えている者は、正社員就職を希望する者の約4割、専門・各種学校への進学を希望する者の約3割を占める(図表3)。この結果は、フリーターという選択が必ずしも主体的なものではなく、結果的なものである場合が少なくないことを示唆している。

< 高校でのキャリアガイダンスと卒業後のフォロー >

この調査では、高校でもっと教えてもらいたかったことについても尋ねている。図表4のように、「生徒がどんな仕事に向いているか」、「職業に就くために必要な資格」、「世の中にはどのような仕事があるか」などの情報は、フリーターになるつもりかどうかにかかわらず、多くの生徒に求められていることがわかる。このようなキャリアガイダンスは、就職を希望する者だけでなく、進学を希望する者にとっても重要であろう。仕事や働き方について考えることは、どんな生き方をしたいかを考えることでもあるからだ。

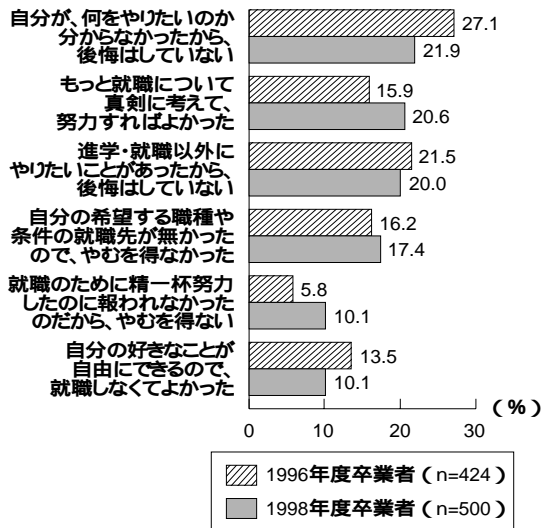
ただし、若年層に対するこうした意識啓発は、学校教育だけに責任を求めていくべきものではない。家庭・地域社会などのさまざまな場面を通じて、若者が長期的なライフデザインを思い描くきっかけとなるような総合的な仕掛けづくりを行っていく必要がある。また、在学生への職業意識啓発に加え、卒業後のフォローも重要である。労働省では、2001年度から東京都、大阪府、神奈川県、兵庫県のハローワークにフリーター向けの相談窓口を設置する計画を予定している。後悔したらやり直せる道を整備し、若者が迷いを繰り返しながらも前向きな進路選択をするための総合的なサポート体制が望まれる。

図表1 無業者比率の推移(卒業学校別)



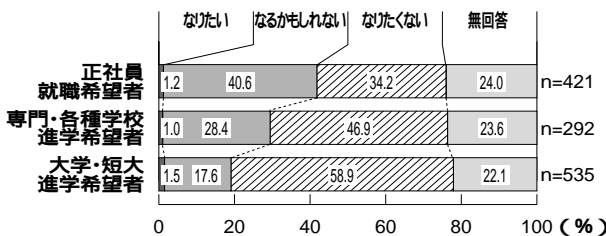
注1:2000年のデータは速報値
 注2:無業者比率とは、進学しなかった者に占める就職しなかった者の割合
 (【無業者比率】=【無業者】/【無業者+就職者】)
 注3:高校卒・高専卒の無業者には一時的な職に就いた者が含まれ、短大卒・大学卒の無業者には含まれない
 資料:文部省『学校基本調査』

図表2 進学も就職もしなかった(できなかった)ことに対する評価



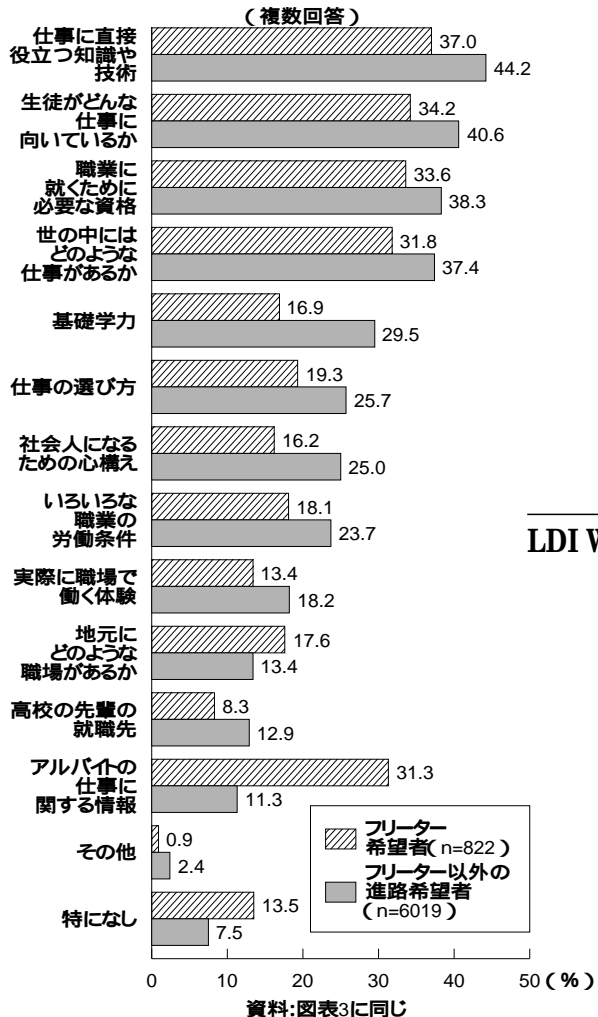
注:調査実施時期は2000年2月~3月
 調査対象者は、全国の高等学校(公立・私立)を1996年3月と1998年3月に卒業し、卒業後ただちに就職も進学もしなかった者1923名(有効回収数は924票)
 資料:文部省『高校生の就職問題に関する検討会議中間まとめ』(2000年8月)

図表3 進路未決定の高校3年生におけるフリーターへの志向性(予定進路別)



注:調査実施時期は2000年1月、調査対象者は東京・千葉・埼玉・神奈川の公立高校52校の高校3年生約7930名(有効回収数は6855票)
 このうち進学・正社員就職を希望し、調査時点で進路が未決定の1248名の回答を記載
 資料:日本労働研究機構研究所『高校3年生の進路決定に関する調査』(2000年8月)

図表4 高校でもっと教えてもらいたかったこと



LDI WATCHING

資料:図表3に同じ